

明日香における歴史展示等のあり方 基本方針

平成22年3月

奈良県

目次

I 明日香の価値

- 明日香の歴史 ～国家基盤が形成された地～ 1
- 明日香に対する取り組み 1～2

II 歴史展示の目的

- 明日香における歴史展示の現状 3～4
- 検討の経緯 4～5
- 歴史展示により目指すもの 6

III 歴史展示の内容

- 歴史展示のコンセプト 7
- 歴史展示のコンテンツ（テーマ） 7～8
- 人物（紀伝体）による歴史展示 8～10

IV 歴史展示の手法

- ネットワーク構築による歴史展示 11
- 拠点施設のあり方 12～15
- 明日香歴史回廊 ～歩いてわかる明日香の歴史～ 16
- 遺跡の復原整備 17～19
- 寺院・遺跡等における歴史展示 20～21
- 明日香における動線 21～22

V 今後の展開

- 明日香村整備基本方針・整備計画への反映 23
- 今後の事業展開に向けて 23～24
- 結び 24

明日香の歴史展示等のあり方検討会

■有識者

- | | |
|-------|------------------------------|
| 木下 正史 | 東京学芸大学特任教授 |
| 菅谷 文則 | 奈良県立橿原考古学研究所 所長 |
| 千田 稔 | 奈良県立図書情報館 館長 |
| 田辺 征夫 | 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所 所長 |

■オブザーバー

- | | |
|-------|--|
| 深澤 芳樹 | 独立行政法人国立文化財機構
奈良文化財研究所都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)副部長 |
| 舟久保 敏 | 国土交通省近畿地方整備局国営飛鳥歴史公園事務所 所長 |
| 藤田 尚 | 明日香村会計管理者、政策調整課長 |
| 北浦 敬教 | 明日香村文化財課長 |
| 舞鶴 正治 | 財団法人飛鳥保存財団 常務理事 |

■奈良県

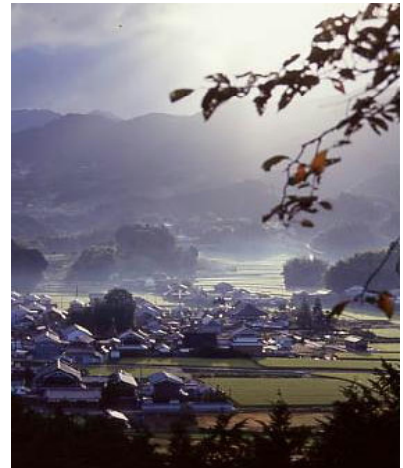
- | | |
|-------|-------------|
| 荒井 正吾 | 奈良県知事 |
| 中野 理 | 奈良県地域振興部 部長 |

I 明日香の価値

■明日香の歴史 ～国家基盤が形成された地～

推古天皇が豊浦宮に即位した592年から、持統天皇が都を藤原京に移した694年までの6世紀末から7世紀末に至る約100年間を一般的に飛鳥時代と言いますが、この約1世紀の間、難波京と大津京に遷都された一時期を除いて、おおむね明日香村の区域内において都が営まれました。

天皇という称号や日本という国号が初めて用いられ、律令が初めて制定されるなど、日本の古代国家体制が形成された地域であるとともに、仏教などの大陸文化の影響を受けいわゆる飛鳥文化が開花した地域、それが奈良県明日香村です。



(明日香村を遠望)

明日香において、国家の基盤が形成されました。

明日香の価値は、まさにこの歴史そのものだと言えます。

■明日香に対する取り組み

我が国の律令国家体制が初めて形成された時代の政治の中心地である明日香村においては、大陸文化や飛鳥文化を構成する宮殿、寺院、古墳、飛鳥川、甘樫丘などの歴史的文化的遺産と周辺の環境が一体となった他に類例を見ない貴重な歴史的風土を形成しています。

この歴史的風土を国民の資産として、開発の波から守り良好な状態で保存するとともに、この風土を末永く後世に伝えるため、昭和55年に明日香村特別措置法が制定されました。

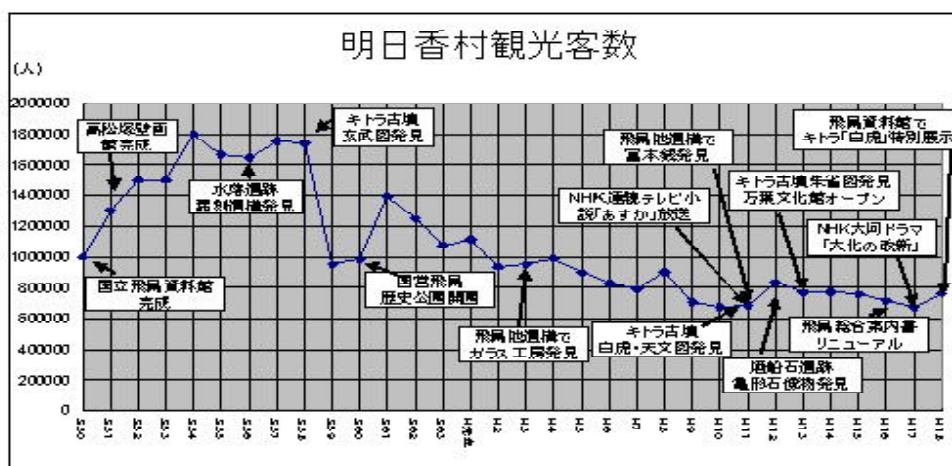
明日香村特別措置法及び奈良県が制定した風致地区条例等の規制、そして何よりも明日香村民の歴史的風土に対する理解と協力により、概ね良好に歴史的風土が守られ、また、昭和55年度以来、奈良県が3次にわたり策定した明日香村整備計画により、道路や上下水道等の生活環境や産業基盤の整備が図られるとともに、文化財の発掘や文化観光施設の整備が進められ、明日香村の生活水準の向上に一定の成果をみたところです。

なお、現行の第3次明日香村整備計画が平成21年度に終期を迎えるにあたり、国土交通省の社会資本整備審議会に「明日香村小委員会」が設置され、平成20年10月以降、「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等を今後一層すすめるための方策はいかにあるべきか」について、4回にわたって審議されてきました。



(明日香村小委員会での荒井知事)

明日香村を訪れる観光客数は、昭和54年には180万人を数えましたが、現在は70万人台で推移しています。最近は、奈良文化財研究所飛鳥資料館（以下、「飛鳥資料館」という。）におけるキトラ古墳壁画の特別展示により若干の増加が見られますが、全体傾向としては右肩下りの状況にあります。このような観光客数の減少に加え、定住人口の減少や高齢化の進展等に伴う地域活力の減退、また厳しい明日香村の財政状況を踏まえ、平成21年7月に、「整備計画の推進、及び国の貴重な財産である歴史的風土の保存のために、引き続き国、県の支援は不可欠」との答申がなされたところです。



※明日香村小委員会

- 設置：H20.9.25、諮問：H20.9.25、答申：H21.7.16
- 第1回：H20.10.17、第2回：H21.2.10、第3回：H21.4.17、第4回：H21.5.29
- 委員 越澤 明（北海道大学大学院教授）、荒井 正吾（奈良県知事）、
関 義清（明日香村村長）、木下 正史（東京学芸大学特任教授）ほか

Ⅱ 歴史展示の目的

■明日香における歴史展示の現状

明日香の価値は歴史そのものにあると言っても過言ではありません。しかし、歴史に関する基礎知識等があまりない一般の来訪者にとって、明日香を歩いても明日香の歴史、そして価値が理解できないのではないのでしょうか。

掘り出された土器のかけらや木簡等の遺物、かつての建物の柱跡や礎石等の遺構、宮殿跡や寺院跡等の遺跡。明日香には「歴史物」が多数残っています。

例えば、伝飛鳥板蓋宮跡には、後飛鳥岡本宮及び飛鳥浄御原宮の柱の跡などが復原されています。しかし柱の跡を見ても当時の宮殿を想像することは難しいのではないのでしょうか。

また、飛鳥板蓋宮では古代史最大の事件である大化の改新（乙巳の変）があったとされていますが、大化の改新に関する知識がないと、現在の伝飛鳥板蓋宮跡を見ても当時の歴史を理解し、体感していただけないというのが実情です。



(伝飛鳥板蓋宮跡)

明日香においては、「歴史物の展示」はあっても「歴史の展示」が不十分であるといえます。

もう一つの例として、明日香村阪田に飛鳥五大寺の一つであった坂田寺跡があります。発掘調査により、奈良時代の仏堂や回廊が確認されていますが、それが現地においてどれくらいの規模でどんな配置であったのか、また飛鳥五大寺の一つに上げられるほど価値の高い寺院であったのはなぜなのか、このお寺の歴史的な位置づけはどのようなものなのか等の解説がほとんどなされていません。

現地に行くと数行の解説文と一本の石碑のみです。この坂田寺も渡来人との関係が深いとされていますが、英語はもとよりハングルや中国語による解説もありません。

多くの明日香の寺院や遺跡等、韓国や中国から強い影響を受けているということは歴史上明らかであるにもかかわらず、韓国や中国から来られた歴史に興味のある方の立場からすると、現地に赴いてもハングルや中国語での解説も不十分であり、書いてあったとしても韓国・中国との“ゆかり”に触れられておらずがっかりしたという話しも聞くところです。



(坂田寺跡の解説板)

また、明日香村内には、飛鳥資料館や奈良県立万葉文化館などの展示施設があります。しかし、明日香の「歴史」を展示するという視点に立ったとき、設置主体の違いもあり、施設間での役割分担は明確でなく、また施設内での展示と寺院・遺跡等での展示の連携が意識されていないのが現状です。



(奈良県立万葉文化館)

見るだけでは理解がしがたい「歴史」というものを、様々な手法によって展示することが必要であり、そのためには、貴重な文化財、特に地下にあるものをわかりやすく解説する、あるいは建物や遺構などを復原することも必要です。

明日香ファン、歴史愛好家であれば、明日香を歩けば明日香の歴史がわかるかもしれませんが。しかし、一般の来訪者の方々にとって、個々の遺跡や寺院あるいは展示施設を訪れても、それらにおいて体系立った展示が行われていないため、明日香のきれいな田園風景を楽しむことは出来ても、明日香の価値そのものである「歴史」がわからないまま、帰路につくケースが多いものと思われま

す。歴史の展示で来訪者に感動を与えたい。これが奈良県において歴史展示のあり方を検討するに至った一番の理由です。

■検討の経緯

奈良県では、第4次明日香村整備計画を策定するにあたり、明日香での歴史展示の現状を踏まえ、第1章で述べた「明日香村小委員会」において問題提起を行いました。明日香における歴史展示等については、奈良県が中心となって国・村等関係機関の協力を得ながら、歴史展示等のあり方に関する検討を行うべきとの議論がなされました。

このため奈良県では、平成21年4月に「明日香村の歴史展示のあり方有識者座談会」を開催し、明日香の意義と歴史展示の重要性について議論するとともに、6月には、「明日香の歴史展示等のあり方検討会」（以下「あり方検討会」という。）を設置し、我が国の国家基盤が形成された地である明日香を、国家形成の経路が体感でき回想できる地として後世に残していくため、「歴史展示等のあり方」について検討を行いました。

「あり方検討会」は奈良県知事及び有識者等で構成され、平成21年6月、8月、11月の3回にわたって検討を行いました。

もちろん、明日香の歴史展示は奈良県だけが行っていくものではありません。国土交通省や文化庁、そして明日香村などの関係機関が一体となって取り組んでいく必要があります。

す。このため、奈良県としては、関係機関の共通認識の醸成を図るため、「明日香の歴史展示等のあり方基本方針」を策定しました。

※「明日香村の歴史展示のあり方有識者座談会」

- ・平成21年4月10日 奈良県庁
上野誠（奈良大学教授）、菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）、千田稔（奈良県立図書情報館館長）、増井正哉（奈良女子大学教授）、和田萃（京都教育大学名誉教授）、荒井正吾（奈良県知事）
- ・平成21年4月14日 奈良県東京事務所
石澤良昭（上智大学学長）、佐藤信（東京大学教授）、田辺征夫（奈良文化財研究所所長）、荒井正吾（奈良県知事）

※「明日香の歴史展示等のあり方検討会」

・有識者

木下正史（東京学芸大学特任教授）
菅谷文則（奈良県立橿原考古学研究所所長）
千田稔（奈良県立図書情報館館長）
田辺征夫（奈良文化財研究所所長）

・オブザーバー

奈良文化財研究所都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）
深澤芳樹（都城発掘調査部副部長）
国土交通省近畿整備局国営飛鳥歴史公園事務所
舟久保敏（国営飛鳥歴史公園事務所所長）
明日香村
藤田尚（会計管理者 政策調整課長）
北浦敬教（文化財課長）
財団法人飛鳥保存財団
舞鶴正治（常務理事）

・奈良県

荒井正吾（奈良県知事）、中野理（奈良県地域振興部長）



（明日香の歴史展示等のあり方検討会）

（以下敬称略）

※関係各課

地域づくり支援課、観光振興課、ならの魅力創造課、国際観光課、文化課、土木部総務室、
道路・交通環境課、河川課、公園緑地課、文化財保存課

○第1回検討会 平成21年6月11日

議題：歴史展示の対象、遺跡の復原 など

○第2回検討会 平成21年8月10日

議題：展示する歴史の中味（テーマ、キーワード）

歴史を展示する手法（拠点施設の役割分担、遺跡復原） など

○第3回検討会 平成21年11月24日

■歴史展示により目指すもの

奈良県を訪れる観光客は、年間約3,500万人ですが、その3分の1以上の1,380万人は奈良市を訪れています。平成22年には、平城宮跡を中心に歴史をテーマとしたイベント＝平城遷都1300祭が開催されますが、平城宮跡すなわち奈良市を訪れた観光客を、我が国の国家基盤が形成された地である明日香をはじめ、県内各地へ導く必要があります。

このため平城遷都1300年祭においては、「奈良歴史探訪回廊」として、県内各地の歴史、文化、自然等の様々な素材を活用し、「巡る奈良」をキーワードに、「宮」の変遷や世界遺産をはじめ、県内各地で地域の特性を活かしたイベント等を行うこととしています。

1300年祭は平成22年だけのイベントですが、大切なのは、その後の取り組みです。奈良県の北における歴史展示の拠点となる奈良エリア（平城宮跡及び奈良県立美術館）とするのに対し、奈良県の南における歴史展示の拠点は明日香です。明日香を歴史展示の拠点のみならず中南和観光の拠点と位置づけ、1300年祭の終了後においても、県内周遊観光ネットワークの強化を図っていく必要があります。

奈良、そして明日香の価値は歴史です。

昭和45年、明日香に魅せられ明日香の地に移り住んだ大阪の漢方医御井敬三（みいけいぞう）氏が、明日香村の保存を訴える“声の直訴状”を当時の佐藤栄作首相に送られましたが、その中で「日本の国の成り立ちから、日本の国がどういう国がらであるかを知ること、日本人にとって最も大切な事柄」と書かれてあり、明日香の歴史展示を進めることは、我が国の歴史に対する認識を深めることに繋がります。

歴史展示は明日香だけの課題ではありません。奈良県全体、ひいては我が国全体の課題です。今回検討した明日香における歴史展示の基本方針を参考に、今後、奈良県全体の歴史展示という課題に向けた検討を行うことも必要です。

歴史展示という取り組みを行うことで、より多くの方々に明日香や奈良が持っている「歴史的な価値」や「東アジアとのゆかり」を体感し回想していただくとするものです。

明日香における歴史展示の目的

明日香の意義や歴史認識が理解し難い状況
(明日香に来て歴史がわからない…)

国家基盤の形成の地である明日香を、国家形成の経路が体感でき回想できる地として後世に残すことが必要

○明日香＝中南和観光の拠点
→中南和地域の振興
○歴史展示のモデル構築
→奈良県全体へ広める

Ⅲ 歴史展示の内容

■歴史展示のコンセプト

御井敬三氏は、前述した“声の直訴状”の中で「明日香の古京を逍遥すれば誰しも日本のこの国が如何にして形成され、如何なる経路を辿ってきたかを回想せずにはおられない」とも書かれています。

この書簡がきっかけとなり、昭和55年の明日香法制定に繋がったということで、まさに飛鳥保存の恩人というべき人物の言葉ですが、一方で、すべての人が明日香を歩けば国家形成の経路を回想することが出来ないのも事実です。

これまでの明日香観光は、いわゆる明日香ファン・歴史愛好家中心に支えられきましたが、歴史愛好家の方には、これまで以上に明日香の価値を認識していただけるような展示に努めるとともに、奈良県など行政機関は、一般の来訪者に対しても、明日香に来れば明日香の歴史を体感でき、明日香の価値を認識していただけるような展示に努めることが必要と考えます。

このため、明日香の「歴史展示」においては、一般の方には「わかりやすく」、歴史愛好家の方には「知的好奇心を刺激する」ことをコンセプトにします。

歴史展示の対象者としては、歴史愛好家も含めた、国内外からの観光客など幅広い来訪者とします。特に一般の来訪者に明日香の歴史を体感してもらうため、展示する歴史の内容は、基本的に中学校あるいは高等学校の教科書レベルとし、事前の学習が十分でなくても、明日香に来れば、明日香の歴史をわかりやすく、そして楽しく学ぶことができるようなシステムを構築します。

また、歴史愛好家の方に対しては、中国・朝鮮半島との比較展示等の手法により、知的好奇心を満たすこととします。

これらの取り組みの指針となるものが、この「明日香の歴史展示等のあり方基本方針」であり、県としてはこの基本方針に従って歴史展示を推進するとともに、国や明日香村、広く寺院等の民間における歴史展示のガイドラインとなることを期待します。

■歴史展示のコンテンツ（テーマ）

来訪者に歴史をわかりやすく楽しく体感してもらうためには、歴史展示を「内容（コンテンツ）」と「手法」の二つの視点から検討する必要があります。

一つ目の「展示する歴史のコンテンツ」についてですが、

一口に飛鳥時代と言っても、多くの歴史上の事件・事象があり、また多くの人物が登場することは言うまでもありません。そのような中で、どんな切り口で歴史を展示するのかを定めなければなりません。

そのため、「あり方検討会」では、先に述べた歴史展示のコンセプトに則り、まず「展示する歴史のコンテンツ」についてを議論を行い、**別紙1**のとおり「**国家の源流**」「**仏教の伝来と興隆**」及び「**東アジア文化の受容と変容**」という飛鳥時代を象徴する3つのテーマを設定し、それぞれのテーマごとにキーワードを設定しました。なお、これらテーマ及びキーワードは、中学校・高等学校の教科書等で見られるテーマ設定を基本としています。

例えば、「**仏教の伝来と興隆**」というテーマに対して、崇仏論争や仏教興隆策などのキーワードを設定し、これらキーワードから、飛鳥時代における「**仏教の伝来**」を来訪者に理解してもらうことを目指します。

■人物（紀伝体）による歴史展示

テーマを展示する場合、その説明の仕方というものが論点となります。歴史を年代ごとに追う形、いわゆる編年体で説明する方法もありますが、歴史を動かし形をつくるのは基本的に人であり、一般の来訪者に明日香の歴史を「わかりやすく」展示するためには、代表的な人物に焦点をあててテーマを説明するという紀伝体の手法が有効だといえます。

まず、「**国家の源流**」「**仏教の伝来と興隆**」「**東アジア文化の受容と変容**」という3つのテーマ及び「**飛鳥時代の通史**」を語る人（＝語り部）というものを設定します。

通史及び3テーマの語り部の候補については、**別紙1**のとおりとします。

- ・「**飛鳥時代の通史**」に関しては 太安万侶
- ・「**国家の源流**」というテーマに関しては 藤原不比等
- ・「**仏教の伝来と興隆**」というテーマに関しては 道昭
- ・「**東アジア文化の受容と変容**」というテーマに関しては 南淵請安

具体的な展示方法については、映像等の中でその人物が、テーマに関連するキーワードや人物を“わかりやすく”音声で語ることにします。基本的には中学校教科書レベルの内容とし、後述する県立万葉文化館（歴史展示の総合拠点施設）において、明日香を訪れた一般の来訪者を主対象に、明日香の歴史を概略的に展示することとします。語り部によるストーリー(案)については、**別紙2**のとおりです。

次に、一般の来訪者だけでなく、歴史愛好家の方の知的好奇心を刺激する展示として、テーマにふさわしい中心人物を取り上げ、その人物をとりまく脇役と相まってテーマを語るためのストーリーを作成し、県立万葉文化館施設あるいはその人物と縁のある寺院や遺

跡等において、パネル展示やイラスト、映像などによって展示することとします。

なお、テーマに従って取り上げる中心人物例については、**別紙1**のとおりです。

- ・「国家の源流」というテーマに関しては
推古天皇、天智天皇（中大兄皇子）、天武天皇（大海人皇子）、藤原不比等
- ・「仏教の伝来と興隆」というテーマに関しては
蘇我稲目、聖徳太子（厩戸皇子）
- ・「東アジア文化の受容と変容」というテーマに関しては
南淵請安、観勒、柿本人麻呂

例えば、「仏教の伝来と興隆」というテーマに対しては、聖徳太子（厩戸皇子）という人物を取り上げますが、太子を取り巻く登場人物＝脇役として、推古天皇、蘇我馬子と小野妹子を設定し、基本的には高等学校までの教科書レベルでストーリーを作成します。その際、「仏教の伝来と興隆」というテーマをより理解してもらうのにふさわしい場面設定を行うなど、メリハリのつけたストーリー作成に心掛けるものとします。人物によるストーリー案については**別紙3**のとおりです。

なおこの場合、展示するのは聖徳太子という人物ですが、聖徳太子という人物を紹介するのが目的ではなく、あくまでも歴史のテーマ、この場合は「仏教の伝来と興隆」という歴史の大きな流れを来訪者にわかっていただくことが目的です。

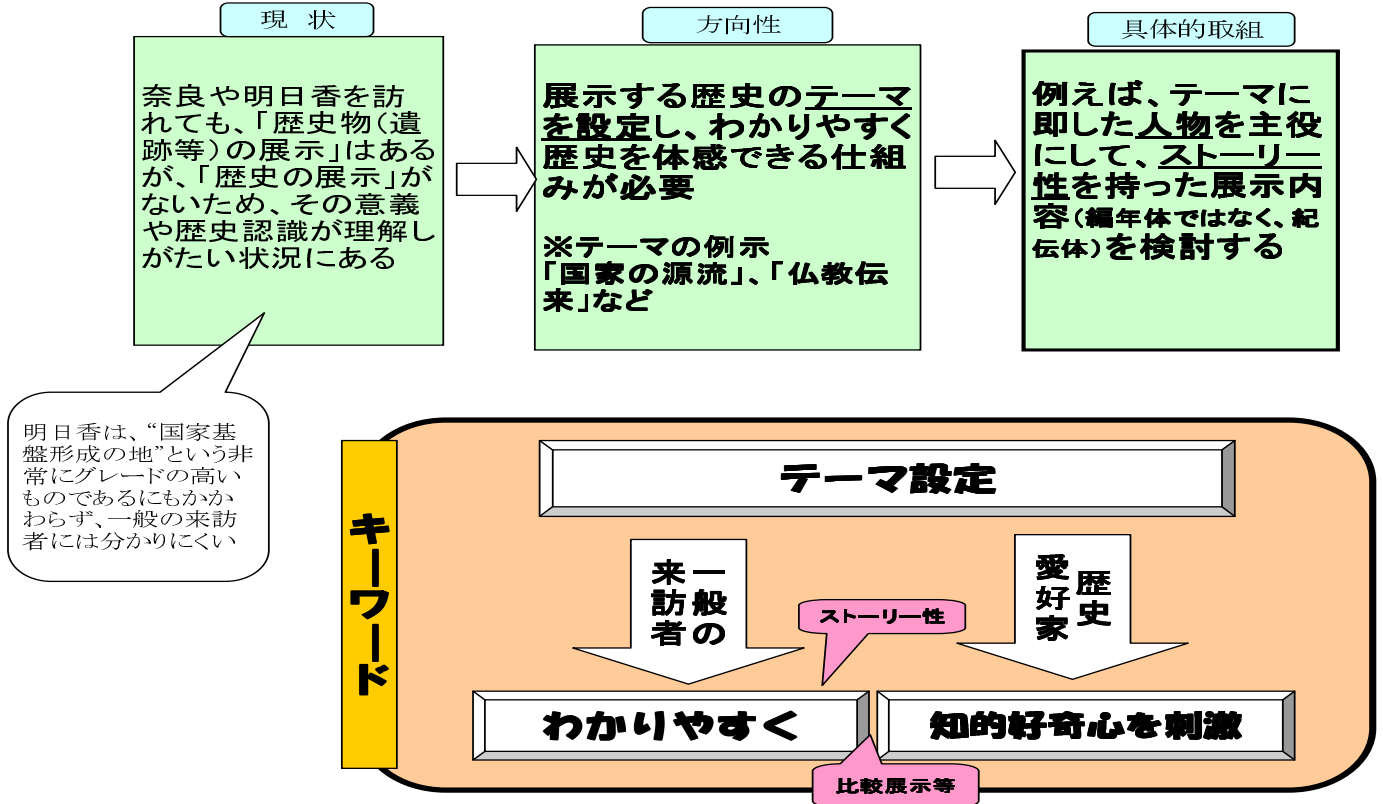
このように、県立万葉文化館においては、語り部によるテーマ説明や中心人物について映像やパネル等により展示するとともに、明日香村の地図を掲示して現地(寺院や遺跡)への誘導を図り、さらに「ゆかり」を示す東アジアの地図も掲示します。また、聖徳太子を例にとると、より身近に聖徳太子という人物を体感してもらうために、例えば聖徳太子のフィギアを設置したり、聖徳太子に縁の深い場所である小墾田宮跡や橘寺において、それぞれの場所にふさわしい解説を行うこと等を検討します。

明日香を歩けば、その歴史に縁の深い人物の展示がいたるところにあり、歴史にあまり興味のない一般の来訪者であっても、人物を通して明日香の歴史、例えば「国家の源流」というものがわかり、再び明日香を訪れた際には、別の人物を通じて「仏教の伝来と興隆」がわかる…。そのような展示の工夫が必要です。

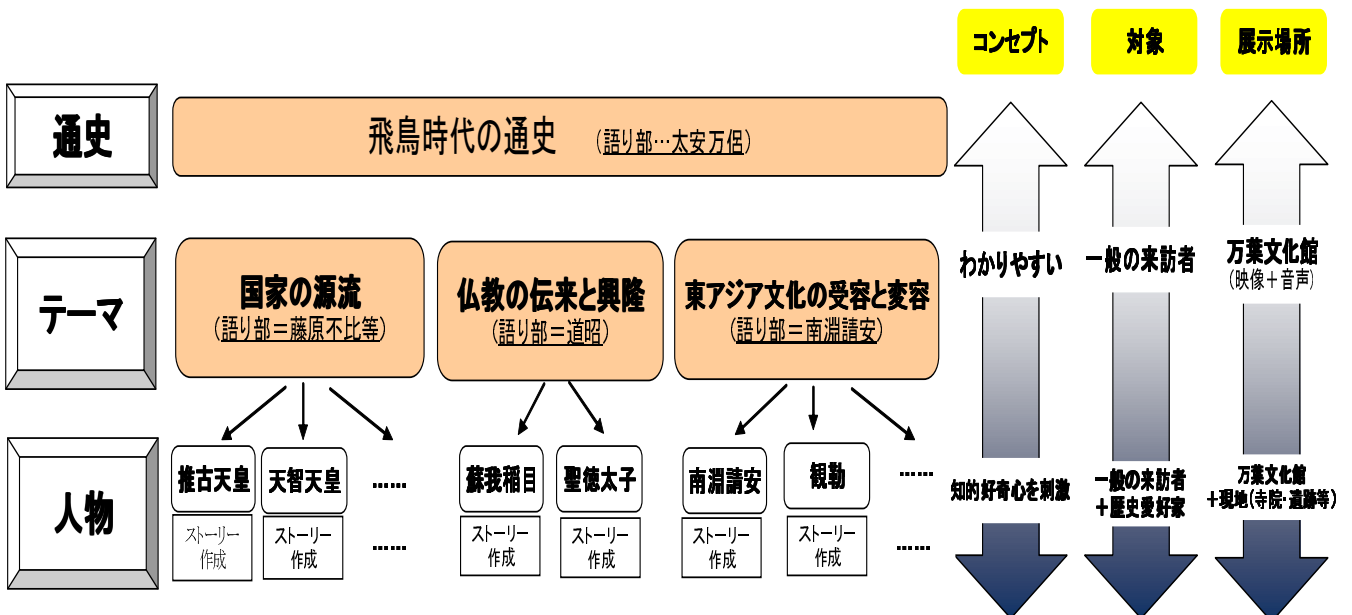
また、「国家の源流」というテーマに関しては、例えば国家を構成する要素の一つである徴税権について、当時における税金と今日の税金を比較して展示するなど、「比較展示」によりわかりやすく展示する工夫も必要です。

明日香には、繰り返し訪れるだけの価値＝歴史がありますが、来訪者が「繰り返し訪れたい」と思えるシステムの構築が必要です。

明日香における歴史展示等のあり方

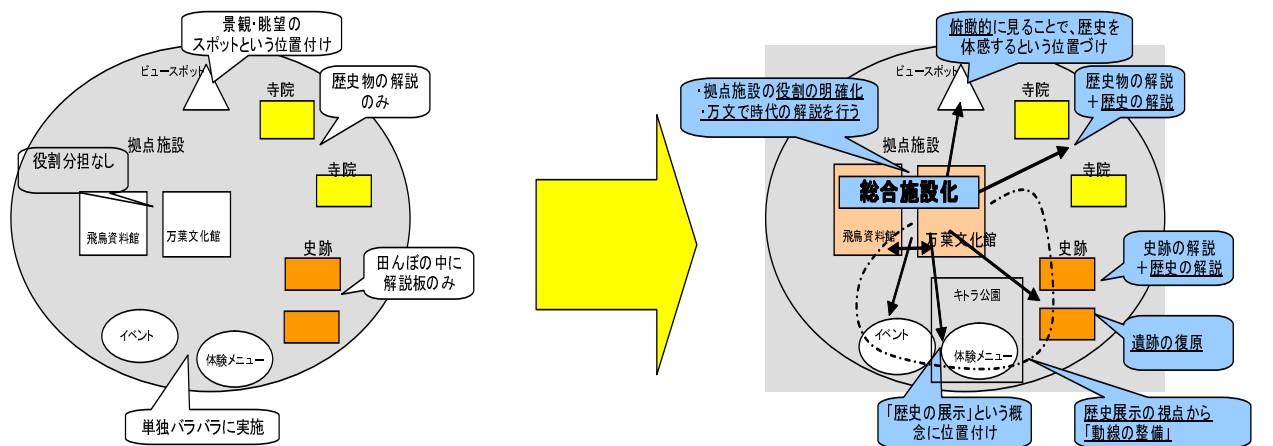


人物(紀伝体)による歴史展示



IV 歴史展示の手法

■ネットワーク構築による歴史展示



(明日香における歴史展示の現状と将来像の概念図)

※破線：動線 矢印：人の流れ

歴史展示のあり方を検討するにあたり、まず前章において内容面での検討を行い、明日香の3つの大きな歴史テーマを、人物（紀伝体）により展示することとしました。

次に、その展示する歴史の内容を、明日香村において具体的にどのような方法で展示するのかについて「あり方検討会」で議論を行いました。

先に指摘したとおり、明日香の価値は「歴史」そのものにあるにもかかわらず、発掘された土器や木簡、また寺社や遺跡などの「歴史物」は多数存在しても、「歴史」そのものの展示が充分になされていません。

「歴史」そのものを展示するためには、

施設間の役割分担により各施設において歴史を総括的かつ俯瞰的に展示するとともに、一部遺跡の復原、また寺院等における歴史解説などによって、明日香の「歴史」を多面的に展示することが必要です。

それを概念化したものが上図であり、

現状は左側にあるのように“「歴史物」の展示がバラバラにあるだけで、「歴史」が体感できない状況”であるのに対し、今後は右側の図のように“拠点施設の役割分担や遺跡の復原、また寺院・遺跡等での歴史の解説を行い、そしてそれらがお互いに連携することで「歴史を総合的に展示」していく”ということを示しています。

もちろん、「歴史物」の展示に関しても、すべての展示物が十分に解説されている訳ではありません。「歴史」の展示と合わせて、「歴史物」の解説についても充実を図ることが必要です。

「拠点施設及び現地（遺跡や寺院等）がネットワーク（相互連携）された歴史展示システム」。これが、明日香における歴史展示の手法ということになります。

■拠点施設のあり方

明日香村内における規模の大きい展示施設としては、飛鳥資料館、県立万葉文化館、そして現在整備を行っている国営飛鳥歴史公園キトラ古墳周辺地区での施設（以下、「キトラ公園」という。）の3つがあります。

※県立万葉文化館

- ・平成13年オープン
 - ・運営：財団法人 奈良県万葉文化振興財団
 - ・万葉集を軸とした古代文化に関する総合文化拠点
- 万葉集に関する調査・研究機能のほか、わが国を代表する日本画家が描いた万葉日本画の展示を行っている。



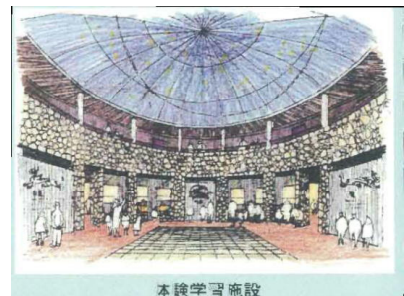
※飛鳥資料館

- ・昭和50年オープン
- ・運営：独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
- ・飛鳥の歴史と文化を分かりやすく学べる資料館。宮殿、寺院、遺跡などの復元模型や出土品を展示している。



※キトラ公園

- ・平成28年度を目途に整備中
- ・整備：国土交通省 国営飛鳥歴史公園事務所
- ・キトラ古墳や檜隈寺跡などの歴史資産を生かしつつ、東アジアとの交流で培われた古代飛鳥の歴史文化の体験を通じ、学習できる公園として整備中



これら明日香における展示施設＝拠点施設について、次のような役割分担を基本とします。

県立万葉文化館

歴史の総合展示施設

歴史テーマや人物等により「歴史」を総合的に展示する施設

飛鳥資料館

歴史物の総合展示施設

明日香村における出土品等の「歴史物」を総合的に展示する施設

キトラ公園

歴史を体験・学習する施設

歴史物の鑑賞をはじめ各種体験を通じ歴史を学習する施設

○県立万葉文化館の今後のあり方


現在の県立万葉文化館は、前述のとおり万葉集を軸とした古代文化に関する文化施設という位置づけです。とはいえ、事前の発掘調査で明らかになった「飛鳥池工房遺跡」について、発掘調査時の状態を実物大で復原するとともに、特別展示室において日本最古の铸造銭「富本銭」（レプリカ）などの展示も行っており、歴史物に関する展示施設という役割も担っています。また、平成21年5月からは、中南和地域の観光情報を発信する「インフォメーション明日香」をエントランス内に開設するとともに、コンシェルジュ（窓口対応者）1名を配置し、明日香村内の観光案内や中南和地域のイベント情報等の提供を行っています。


前章で述べた3つの歴史テーマ（「仏教の伝来と興隆」など）、あるいは人物（聖徳太子（厩戸皇子）など）を展示する場合、施設外でまとまった展示を行うことは物理的に困難であり、やはり施設内において、パネルや映像、またレプリカ等で展示することが望ましいと言えます。

新たな展示施設、例えば他府県等で見られる「歴史博物館」を開設することも考えられますが、ロケーション等から既存の県立万葉文化館を有効に活用することが現実的な対応と考えられます。

なお、他府県等の「歴史博物館」は、歴史そのものの展示機能も有していますが、歴史物（出土品や仏像など）の展示も行っているところが多く見られます。

※近畿における歴史博物館の例

大阪歴史博物館		住所	大阪市中央区大手前		設置主体	大阪市		展示面積	23,606m ²		
		開設(改装)	平成13年11月		運営主体	(財)大阪市文化財協会					
歴史展示											
展示テーマ・コンセプト	後期難波宮(奈良時代 744～)の大極殿を原寸大で復元 遷都の日に行われたであろう宮廷儀式を映像で再現 7～10Fのうち、10F全体が古代フロア…9F 中世近代、8F発掘体験、7F近代現代										
展示手法	パネル	映像	レプリカ	タッチパネル式	パソコン	ジオラマ	その他				
	○	○映像が多数あり	○大極殿そのものを復元	○多数あり	○各所に多数あり	○前期・後期難波宮	官人(役人)の人形が多数				
歴史物展示	難波宮から発掘された瓦、土器、漆容器など										
展示の特徴(写真等)	 <p>左が大阪歴史博物館(右はNHK)</p>		<p>メインの「遷都の日の宮廷儀式」再現においては、音声による解説がなく映像と音楽のみで展示。約4分間</p> <p>電動カーテンが下りる → ①唐 長安での宮廷シーン → ②新羅 慶州での宮廷シーン → ③(後期)難波宮での遷都の儀式 → ④(後期)難波宮の復元図と現在の大阪がオーバーラップ → 電動カーテンが上がる…眼下に難波宮史跡公園を見下ろす</p>								

兵庫県立歴史博物館	住所	兵庫県姫路市(姫路城北側)		設置主体	兵庫県		展示面積	7,466m ²
	開設(改装)	昭和58年4月 平成19年4月リニューアル		運営主体	兵庫県			
歴 史 展 示								
展示テーマ・コンセプト	建物は建築家丹下健三の設計。現代の城をイメージ 常設展示室では原始から近現代に至るまでの兵庫県の歴史を中心に展示 また姫路城をはじめとする日本全国の城郭を紹介							
展示手法	パネル	映像	レプリカ	タッチパネル式	パソコン	ジオラマ	その他	
	○	○	○	○	○	○お城の模型		
歴史物展示	仏像や木簡、土器など多数。姫路城に関する「歴史物」展示が充実。また「こどもはくぶつかん」と称して、懐かしい駄菓子屋のような展示物もあり。							
展示の特徴 (写真等)	<div style="display: flex; align-items: center;">  <div style="margin-left: 20px; border: 1px solid black; padding: 5px;">世界文化遺産「姫路城」に関する展示が充実</div> </div>							

このように、「歴史展示」が中心となるような展示施設は全国的にもあまり例がないものと考えられますが、県立万葉文化館を「**歴史の総合展示施設**」と位置づけ、明日香の歴史展示の中心施設として、前章で検討した歴史テーマ及び人物を展示する施設とします。

具体的な展示場所、展示方法等については、今後の課題となりますが、例えば、現行スペースの一部を「歴史展示室」とし、歴史テーマごとにコーナーを設け、年表や関連史跡・遺物の写真・イラスト、関連地図などを記載したパネル展示、テーマに即した人物の説明や、その人物のフィギュアやレプリカ等の設置、映像情報なども交えることで、県立万葉文化館を「明日香の歴史学習の玄関口」と位置づけます。

一般の来訪者、特に修学旅行生を例にとると、観光バスあるいは電車・路線バスを乗り継いで明日香に来た生徒は、まず県立万葉文化館で明日香の歴史の概要を学んでもらうことになります。そして、県立万葉文化館を拠点として、徒歩やレンタサイクル等によって、それぞれのテーマあるいは人物に関連する現地（寺院や遺跡）、飛鳥資料館など他の拠点施設等へ移動し、それら移動先において、県立万葉文化館での歴史解説と整合した詳しい解説、あるいは本物の遺跡・遺物の復原現場等を見ることで、明日香の歴史そのものを体感してもらうということになります。

また、県立万葉文化館が歴史展示の総合展示施設としての機能を持つ以上、平成21年度から取り組んでいる**案内機能の充実**も必要です。明日香村内の各拠点施設や寺院や遺跡の情報だけでなく、イベントや体験メニューに関する情報を発信する明日香歴史探訪の総合案内機能を持たせるとともに、明日香を奈良県中南和地域の観光拠点としていることから、中南和地域に関する観光情報発信機能の充実を図ることも必要です。

○飛鳥資料館のあり方

飛鳥資料館は、“飛鳥地域”の資料館ということで、明日香村だけでなく山田寺跡（桜井市）の出土品なども展示するとともに、前庭には明日香村から出土した須弥山石、酒船石、猿石などのレプリカを展示するなど、「歴史物」の展示施設として高い機能を有しています。

一方、出土品等の「歴史物」は、発掘した主体がそれぞれの施設で展示を行っているという現実があります。従来から、明日香村における発掘調査は、奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、明日香村教育委員会の三者がそれぞれ行ってきました。このため、明日香の出土品は、橿原市畝傍町にある「奈良県立橿原考古学研究所附属博物館」や明日香村大字飛鳥にある「明日香村埋蔵文化財展示室」などにも別々に展示されています。

来訪者の立場で明日香における「歴史物展示」のあり方を考える時、明日香村内にある展示施設である飛鳥資料館は、「明日香における「歴史物」の総合展示施設」としての位置づけることが望まれます。

設置主体の違いから、出土品の移管等については難しい問題はあるでしょうが、出来る範囲で三者が協力し、飛鳥資料館における展示スペースの強化により、例えば橿原考古学研究所や明日香村埋蔵文化財展示室が保有する出土品や資料を飛鳥資料館で展示することも将来の課題として検討することが必要です。

○キトラ公園のあり方

キトラ古墳周辺地区については、国営飛鳥歴史公園事務所により、平成18年3月に「キトラ古墳周辺地区基本計画」が策定されました。

この中で、

「キトラ古墳の保存と活用、及び檜隈寺跡などの周辺の歴史資産を生かし、東アジアにおける交流で培われた歴史が訴える古代の時空間と生活文化の、歴史と共に育まれた風土の中における体験・学習、あわせて交流を通じた地域の活性化に資する公園づくり」と整備テーマが定められています。また、園内の体験学習館が位置する歴史体験学習エリアでは、様々な歴史的文物の展示等を行うほか、屋内外での体験的歴史学習の中心となる施設を整備することが考えられています。

歴史を体感するためには、知識として学ぶだけでなく、展示物や遺跡を見て感じ、また古代の生活文化等を追体験することは非常に有効な手段です。具体的な展示内容等については、今後国営飛鳥歴史公園事務所によって検討されますが、明日香における他の拠点施設（県立万葉文化館、飛鳥資料館）とネットワーク構築が図られるよう、今後、国営飛鳥歴史公園事務所・奈良文化財研究所・奈良県の三者が連携・協力していくことが求められます。

■明日香歴史回廊 ～歩いてわかる明日香の歴史～

一般の来訪者の方が、歩くだけで明日香の歴史が体感できるよう、「明日香歴史回廊」という展示手法により、**別紙1**にある歴史テーマ等の展示を行います。

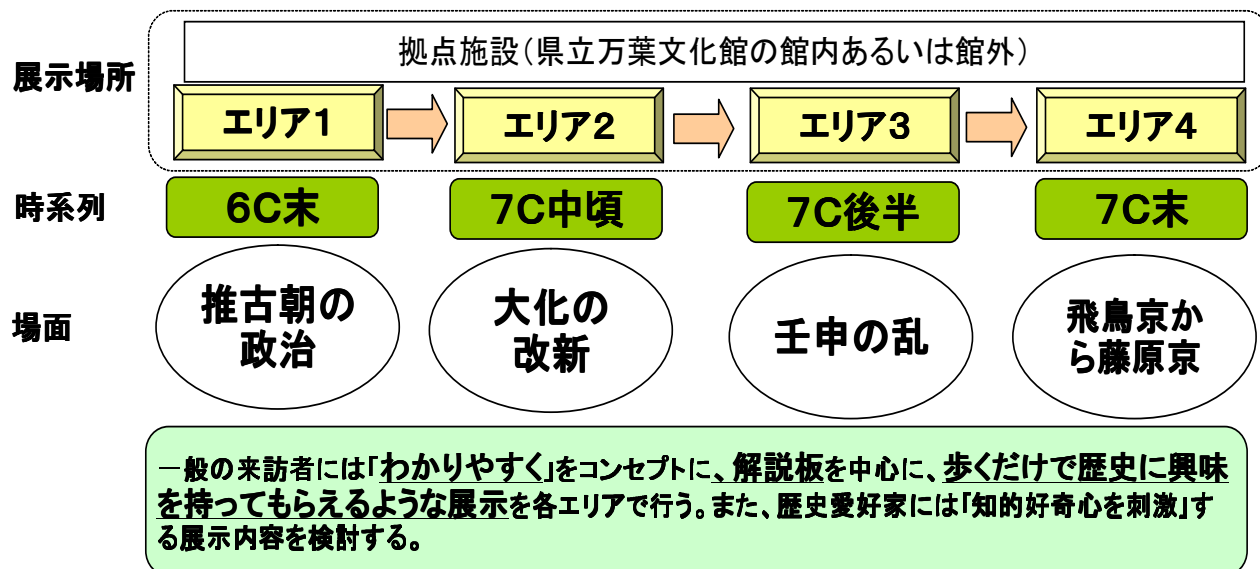
「明日香歴史回廊」とは、拠点施設である県立万葉文化館を中心として、飛鳥時代（6世紀末から7世紀末）における歴史のテーマ(国家の源流、仏教伝来、東アジア文化)、あるいは人物や事象等を展示するというものです。

具体的には、時系列によって回廊上に数カ所のエリア（ポイント）を設定し、それぞれのエリアにおいて歴史テーマに即した場面設定を行い、解説ボードの設置を中心に、一般の来訪者の方が、歴史に興味を持ってもらえるような展示を行うものです。

また、歴史愛好家の方の知的好奇心を刺激するような展示内容を検討します。

例えば、「国家の源流」という歴史テーマを「明日香歴史回廊」で展示する場合のイメージは、下表のとおりです。

例：「国家の源流」



(明日香歴史回廊のイメージ)

■遺跡の整備復原

明日香の文化財の多くは地下に存在しています。しかも、発掘調査を行った遺跡の多くも調査後は埋め戻されてしまい、来訪者の目に触れることが少ないのが現状です。

来訪者に歴史を体感していただくためには、遺跡を目に見える形で復原することが必要です。

○飛鳥京跡苑池

【復原する意義】

伝飛鳥板蓋宮跡の西北に接する飛鳥京跡苑池遺構は、南北約280m、東西約100mにわたる池と石造物、水路などによって構成され、斉明天皇期に造営された飛鳥時代を代表する苑池遺跡です。

大正5年、この地から2個の石造物が掘りだされ、平成11年には橿原考古学研究所により、石造物が発見された場所を中心にその出土状態の確認と遺構の性格の解明を目的として調査が行われました。

これら発掘調査により、飛鳥地域の苑池等の中で最も規模が大きくかつ複雑な構造であり、また中国・朝鮮半島からの影響を受けた飛鳥時代の苑池のデザインを典型的に示すものであることが明らかにされました。平成15年には史跡指定を受けています。



(飛鳥京跡苑池南池の発掘)

この飛鳥京跡苑池を復原することは、一部ではあるが飛鳥時代の風景を再現することになり、来訪者が飛鳥時代への想いを巡らすことができる空間として、その意義は非常に大きいと言えます。また、飛鳥京跡苑池は、庭園の発展を知る上でも重要であることから史跡指定と同時に名勝にも指定されており、平城宮跡東院庭園や平城京左京三条二坊宮跡庭園といった奈良時代との庭園との比較により、その変容を目の当たりに見せることも可能となります。

【復原イメージ】

復原にあたっては、**別紙4**のとおり、発掘調査によりほぼ全容が解明されている南池について、遺構の上に現物と同様の材料を用いたレプリカを被せる形で復原整備するとともに、前述の大正時代に発掘された石造物や、発掘調査で見つかった噴水石造物のレプリカを展示していきます。



(飛鳥京の苑池イメージ図)

また、北池については発掘調査が一部にとどまっているため不明な部分が多く、その西側も飛鳥川の氾濫により遺構が失われているものと考えられるため、全容が明からにされていません。また、建物の存在も確認されておらず、今後の発掘調査が期待されるところですが、次期明日香村整備期間中(平成22年度～31年度)に一定の復原整備を進めるためには、まず南池の復原整備を行い、北池については、かつて池が広がっていたことをイメージできるような何らかの表示を行う方向で今後検討します。

今後、整備する区域内の植栽や整備後の維持管理、また池への水の供給や、飛鳥川の親水性護岸の整備など、検討すべき課題が数多くありますが、これらの復原整備に関しては、史跡指定地の公有化及び発掘調査と並行して、史跡・名勝としての保存と活用の方針を定めた「基本構想」を策定し、この基本構想を踏まえた復原整備の基本計画・実施計画を策定のうえ、奈良県として復原整備を行っていきます。

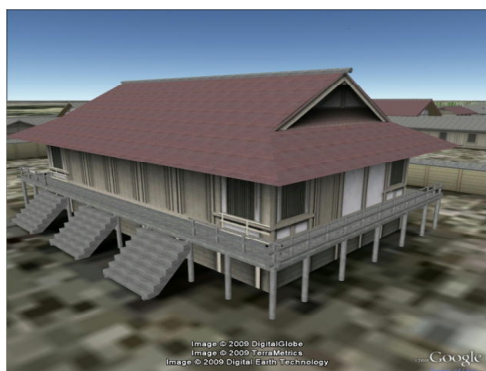
○飛鳥浄御原宮正殿・エビノコ大殿

【復原する意義】

伝飛鳥板蓋宮跡(飛鳥京跡)は、明日香村における宮跡の中でも最も重要なものであり、舒明天皇の飛鳥岡本宮、皇極天皇の飛鳥板蓋宮、齊明天皇・天智天皇の後飛鳥岡本宮、天武天皇・持統天皇の飛鳥浄御原宮の3期にわたる宮殿遺構が重なって存在していると言われてい



(飛鳥の宮 復原模型)

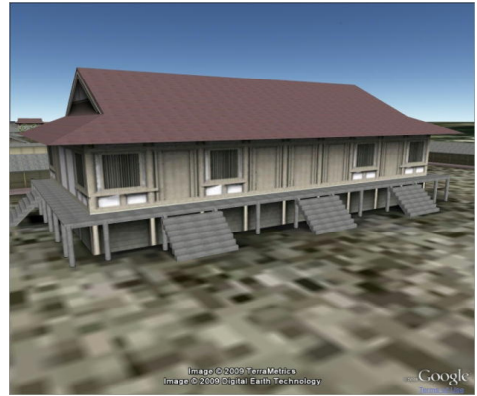


(飛鳥浄御原宮正殿 復原CG)

このうち、7世紀後半の天武天皇と持統天皇の2代が営んだ宮である飛鳥浄御原宮の遺構は、昭和34年より橿原考古学研究所を中心に発掘調査が行われてきましたが、宮殿の中核区画である内郭の正殿や脇殿、内郭を囲む外郭の掘立柱塀などが検出され、具体的な姿が明らかになりつつあります。

昭和54年には、東西7間、南北4間の規模を誇る南区画の正殿が確認されていますが、これは天武天皇の皇居と考えられ、南区画正殿は、四面庇で屋根は檜皮葺はもしくは板葺きで、床張りの掘立柱建物であったと推定されています。

また、エビノコ大殿は、昭和52年の発掘調査で確認され、東西9間、南北5間と飛鳥宮の調査で見ついている建物では最大級のものです。大殿の前面には「庭」と呼ばれる砂利敷きの空間が広がり儀式が行われていたものと推定されています。



(エビノコ大殿 復原CG)

これらを含めたエリアである伝飛鳥板蓋宮跡は昭和47年に史跡指定され、一部環境整備が実施されていますが、それは想定される宮跡のごく一部であり、現状では、この地に立っても国家基盤が形成された地であることを体感し、回想することは相当困難であるのが現状です。

そこで、来訪者に明日香の歴史を体感してもらうことが出来るよう、歴史上意義深い飛鳥浄御原宮正殿及びエビノコ大殿についても飛鳥京跡苑池の整備復原と同じく、奈良県が主体となって国・村等関係機関とも連携しながら飛鳥時代の風景の再現を目指して検討を進めます。

■寺院・遺跡等における歴史展示

第Ⅱ章の「明日香における歴史展示の現状」で取り上げた坂田寺跡の解説板の他にも村内の現地解説板においては、「歴史」の解説（歴史上の位置づけ等）だけではなく、「歴史物」の解説（発掘成果としての伽藍配置等の表示）の面でも不十分なものが多く見受けられます。

また、現在複数の解説板が設置されている寺院や遺跡においても、各設置主体によって統一がとれていなかったり、「歴史」の解説が不十分であるなどの課題が見られるところです。

例えば、石舞台古墳には、**別紙5**のとおり、大きく分けて4種類の解説板があります。国営飛鳥歴史公園事務所が設置した解説板は、「蘇我馬子の墓と推定される」という歴史面での記載とともに、地図や写真を使用し、また英語及びハングルでの表記もあるなど、充実した内容となっています。



(国営飛鳥歴史公園事務所設置の解説板)

一方、昭和53年に奈良県教育委員会が設置した解説板は、発掘の歴史や古墳の形状説明にとどまっています。

【「歴史」の解説と「歴史物」の解説】

寺院や遺跡等での解説板について検討するとき、「歴史」の解説と「歴史物」の解説に分けて考える必要があります。

「歴史」の解説に関しては、第Ⅲ章で取り上げたテーマにふさわしい中心人物によるストーリーを展示する場としての寺院・遺跡という位置づけがあります。例えば、聖徳太子（厩戸皇子）の場合、「歴史」の総合展示施設としての県立万葉文化館においてパネル展示等によって概要説明を行います。が、**別紙3**のとおり、聖徳太子を現地展示するゆかりの場所として、小墾田宮跡や橘寺が想定できます。

もちろん人物展示だけでなく、明日香における歴史テーマ（「国家の源流」など）を、寺院や遺跡等の現地で解説するケースも考えられます。

次に、「歴史物」の解説についてですが、当然ながら明日香には多くの寺院・遺跡が存在します。それらの中で、上記「歴史」解説に関係する寺院や遺跡においては「歴史」解説とともに、必要に応じて「歴史物」解説を行っていきます。また、それ以外の歴史上重要な寺院・遺跡についても、奈良県と各関係者が調整を図りながら計画的に「歴史物」の解説を行っていきます。

第4次明日香村整備計画期間中においては、寺社や遺跡等において、人物を中心とする「歴史」の解説、及び「歴史物」の解説に取り組んでいきますが、「歴史」解説と「歴史物」解説を同時に行うことが可能な場合は、一体的に行っていきます。

なお、解説板が不十分な例とした坂田寺跡については、**別紙6**のとおり「歴史」及び「歴史物」の解説が一体となった解説板のサンプルを作成しています。

これら解説板については、スペースの問題はありますが、イラストや写真等を使いビジュアルに表示するとともに、中国や韓国とのゆかりについては、事実即して記載することとします。また英語だけでなく中国語やハングルでの表記も行うことを基本とし、国内外の来訪者の方が、県立万葉文化館などの拠点施設だけでなく、現地を歩いても明日香の歴史がわかることを目指します。

■明日香における動線

明日香における歴史テーマ（「国家の源流」など）や、テーマに即した人物については、歴史の総合展示施設である県立万葉文化館で概要説明を行うとともに、ゆかりの場所においても「歴史」の解説を行っていきます。

例えば、「聖徳太子」という人物を取り上げた場合、県立万葉文化館と、ゆかりの場所と考えられる小墾田宮跡や橘寺を結ぶルートが『動線』となります。同様に他の人物やテーマによっても、明日香において新たな動線が設定されることとなります。

また、「聖徳太子」の場合は、斑鳩町や桜井市などとも関連しており、全県的なスケールでの動線設定も行い、県立万葉文化館での「聖徳太子」の概要説明においては、“明日香におけるコース（動線）”と“奈良県全体のコース（動線）”を紹介することも考えられます。

明日香においては、すでにいろいろな切り口でルートが設定されていますが、歴史展示という視点から、新たな動線を構築することが必要です。新たな動線構築に伴って、村内各地をスムーズに移動していただけるよう、案内サインの整備を進めていくことも必要です。

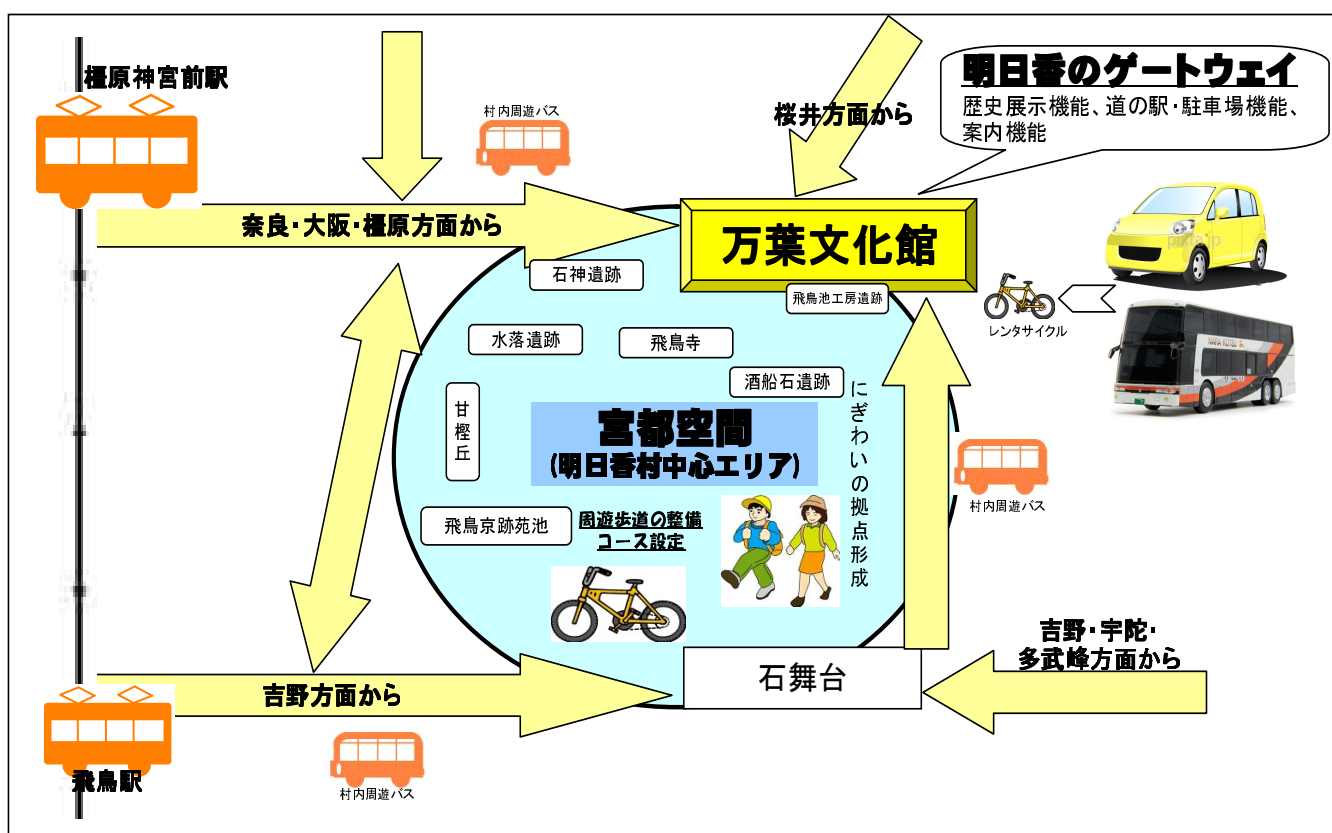
明日香全体の動線については、県立万葉文化館を明日香におけるゲートウェイと位置づけ、駐車場機能を強化するとともに、自動車やバスでの来訪者を道路案内等の情報提供により万葉文化館へ誘導します。また、電車での来訪者については、橿原神宮前駅あるいは飛鳥駅から村内周遊バス等により県立万葉文化館への誘導を図ります。

明日香への来訪者は、まず県立万葉文化館において明日香の歴史を学んでいただき、飛鳥水落遺跡、石神遺跡、酒船石遺跡、飛鳥池工房遺跡、飛鳥京跡苑池、甘檜丘、飛鳥寺な

どの宮都空間（明日香村中心エリア）は、自動車ではなく徒歩や自転車等で周遊することを基本とします。

このため、レンタサイクルや周遊歩道の整備とともに、前述の歴史テーマや人物に即したコース、史跡や寺院を周遊するコースなど、時間のある人、ない人それぞれが明日香を楽しんで周遊していただけるコースの設定及び案内機能強化・コースマップの充実等により、ハード・ソフト両面から明日香における周遊システム＝動線の確立を図ります。また、宮都空間内での電動カート等の導入についても、将来的な課題として検討していきます。なお、宮跡空間だけでなく、明日香全体の動線についても、今後検討を行っていきます。

明日香の動線イメージ図



V 今後の展開

■明日香村整備基本方針・整備計画への反映

第I章で記載したとおり、第4次明日香村整備計画の策定に向けて、昨年10月から社会資本整備審議会が開催され、7月に出された答申において、歴史展示のあり方については、奈良県が中心となって検討することとされました。

これを受けて、今回、国土交通省や文化庁、また明日香村などの関係機関の協力を得て、奈良県において、「明日香における歴史展示等のあり方基本方針」を策定いたしました。

一方、明日香法第4条においては、国土交通大臣は、明日香村の生活環境及び産業基盤整備に関する基本方針＝「明日香村整備基本方針」を策定し、それを受けて奈良県が明日香村整備計画を策定すると規定されています。

このため、明日香における歴史展示等のあり方基本方針の成果は、明日香村整備基本方針及び明日香村整備計画に反映させていくことが必要です。

具体的には、

第IV章で取り上げた、県立万葉文化館の整備（改修）、そして飛鳥京跡苑池等の遺跡復原などを、第4次明日香村整備計画における奈良県が取り組む主要事業と位置づけていきます。

■今後の事業展開に向けて

今回策定した「明日香村の歴史展示等のあり方基本方針」は、あくまでも展示政策の方向性を示すものであり、実際の事業展開に向けては、さらに検討を重ねる必要があります。

展示する歴史の内容については、サンプル的にストーリーを作成しましたが、来年度以降、計画的に残りの人物についてもストーリーを作成する必要があります。その際、そのストーリーに沿って、具体的にどのような手法で、例えば、どの場所でどのような内容の展示を行うか等も考慮する必要があります。

展示手法まで考慮に入れたストーリー作成については、見せる仕掛けを得意とし、動線を意識した屋外展示に対応できる専門機関に委託することが考えられます。

明日香における歴史展示の対象者として、ひとつは一般の来訪者を想定していますが、ストーリー作成に関して、奈良県立高等学校の歴史教員で構成される「奈良県高等学校教科等研究会歴史部会（歴史学会）」の活用や、歴史に特化したカリキュラムを持つ高等学

校(法隆寺国際高校歴史文化科、西の京高校地域創生コース)の授業の一環として取り組むことも考えられます。

また、歴史愛好家に対する知的好奇心を刺激するような具体的な展示内容についても、検討することが必要です。

これらについては、専門家の方々の指導・監修を仰ぎながら、国・村など関係機関とも連携しつつ、県として検討を続けることとしています。

次に、拠点施設としての、県立万葉文化館の整備(改修)については、歴史展示を行うスペースをどこに確保するか、テーマや人物を、パネル展示や映像、CG、レプリカ、フィギュアなどいかなる方法で展示するか、また総合案内機能をどの場所で具体的にどのように持たせるかなど、整理すべき課題が多く残されています。

奈良県全体における展示施設のあり方の検討と合わせ、今後関係部局において速やかに検討することが必要です。

また、遺跡復原については、公有化と並行して整備に向けた基本構想を策定し、それに基づいた基本計画・実施計画を策定していきます。

なお、奈良県庁内の組織体制として、平城遷都1300年祭の終了後を目処に、上記で述べた明日香での検討課題だけでなく、奈良全体の今後の歴史展示を推進する組織の設置等も検討していきます。

■ 結び

「明日香の歴史展示等のあり方基本方針」は、明日香村整備計画を担当する奈良県地域振興部地域づくり支援課において取りまとめを行いました。

この策定にあたっては、明日香の歴史展示等のあり方検討会の構成メンバーである4名の有識者の方々をはじめ、オブザーバーである奈良文化財研究所都城発掘調査部、国営飛鳥公園事務所、明日香村、(財)飛鳥保存財団の皆さま方の多大なご協力をいただきました。

明日香は、東アジア文化との関係の中で、今日に繋がる国家基盤が形成された地です。この地で国家としての基本的枠組みが形づくられ、以来日本は連綿たる歴史を刻んできました。

日本人としての精神的な支柱の模索が続く時代に、日本のはじまりである明日香の歴史展示を進めることは、日本とはどういう国であるのか、日本人とは何者であるのかを自問する道程であるとともに、東アジアをはじめとする海外との新しいゆかりを築く道標でもあると考えており、非常に意義深いことであると自負しています。

奈良県としては、この「明日香における歴史展示のあり方基本方針」に基づき、今後とも国・村などの関係機関と連携・協力しながら、明日香の歴史展示を進めていきます。